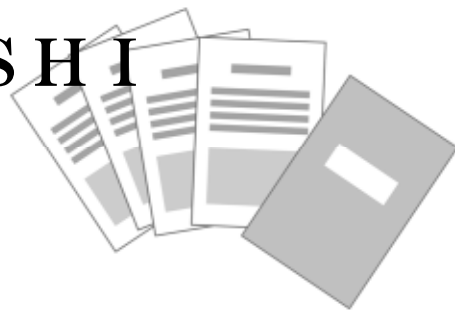


企画委員から

O・MO・TE・NA・SHI

いとう
伊藤あきひで
彰英

●基幹労連 企画調査部部长

記憶に鮮明に残っている方も多いと思われるが、日本の「おもてなし」という言葉が世界に広まったのは、2013年の国際オリンピック委員会（IOC）総会で東京招致に向けた最終プレゼンテーションにて、プレゼンターの滝川クリステルさんが英語のスピーチで「O・MO・TE・NA・SHI」と言葉を区切りながら披露したパフォーマンスによるところが大きい。東京招致決定と相まって、このパフォーマンスはメディアやSNSを通じて瞬く間に世界中に拡散され、日本独自のホスピタリティ概念として強く印象付けられることとなった。実際に、2021年の東京オリ・パラの開催を通じて、「OMOTENASHI」は海外の観光業界でもキーワードとして世界的に定着し、今では、ホテルやレストランのプロモーションのみならず、ビジネス書でも頻出ワードとなるなど、「おもてなし」文化が確立され、その体験を求めた訪日は後を絶たない。

私のカナダの友人もそんな一人で、10年前に来日して日本のおもてなしに感激していたのだが、先日、彼の娘マリアがそんな「おもてなし」に興味を抱いて来日した。3週間ほど日本のさまざまなスポットを観光したのちに、旅の最後に私と東京で落ち合った。彼女は父の10年前の感動そのまま、興奮冷めやらぬままに、行く先で体験した日本のおもてなしのすばらしさについて私に話し始めた。私も日本人のおもてなしの心を、素晴らしいホスピタリティとして自負をもって応えた。

しかし、彼女がどうも怪訝そうな顔をしている。私が「おもてなし」を「ホスピタリティ」と訳し

たことに合点がいかないらしい。彼女曰く、「ホスピタリティ」は慈悲であり、相手への優しさや慈しみの気持ちによる自発的な行為であって、提供者が優位な立場にあることが多いという。それに対して「おもてなし」は行為の提供者と享受者が対等な立場で、どちらかが優位な立場にあるものではなく、お互いがお互いを敬い大切に思う気持ちから発せられる。それは、お互いに良い時を過ごそうと心を尽くすものであって、提供者も享受者もともに笑顔にする、ホスピタリティよりも深く尊いものだろう。

私は、日本の文化がそれほどまでに評価されていること、そして日本人である私自身が「おもてなし」を十分に理解していたとは言えなかったことに、二重で気恥ずかしく、まさに一本とられた気がした。私の英語の語彙力がないことも影響していたとはいえ、彼女は私よりも「おもてなし」の心を深く理解しており、畏敬の念すら抱いていた。日本に住んでいると「おもてなし」にあまり深く思いを馳せることは少ないかもしれないが、マリアの来日は、私にとって「おもてなし」の心を改めて考えるきっかけになった。

そんな彼女に対する私のおもてなしは、マジックアワーにスカイツリーの予約を取ってあげたこと、彼女の帰国日に渡すようにフロントにプレゼントを預けてきたこと。帰国後に彼女のみならず両親からも心温まるメッセージが寄せられたことからすれば、どうやら私の「おもてなし」は成功だったようだ。